
潮風と彼女

やぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

潮風と彼女

【Nコード】

N95100

【作者名】

やぎ

【あらすじ】

三題話です。潮風です。海です。

yagimokiさんは 朝の海辺 で登場人物が さよならを
言う 跡 という単語を使ったお話を考えて下さい htt
p://shindanmaker.com/28927

肌寒い朝だった。海辺の我が家は既に潮のにおいが染み付いてい
る。眠いまなこを擦りながら、体を温める為の珈琲をいれる。真っ
黒な液体が真っ白なコップに注がれていく。眠気を覚ます独特のに
おいに混じっている潮の香り。鼻をつき刺激してくる。

潮のにおいは苦手だ。鼻について離れやしない。そして、強烈に
記憶が刷り込まれる。このにおいを嗅ぐ度に無理矢理思い出させる。
彼女が居なくなったのは何日前だったか。一週間前か、1ヶ月前
か、はたまた昨日だったかもしれない。ただ、潮のにおいが強かつ
たのは覚えている。

俺が潮のにおいが嫌いを知っていても彼女は常に海側の窓を開け
ていた。

「さよなら……なのかな? これで」

こんな時でも彼女は窓を開けている。

「多分ね」

彼女ははっきりと告げた。潮風の音に負けないはっきりした声。
彼女は俺の顔を見ようとしないう。窓の外に目を向けている。今、ど
んな顔しているのか分からない。俺自身、どんな顔をして彼女を見
て良いのか分からない。

「ははは、実感ないな……」

力がなくなっていく。潮風の音に耳を澄ませる。ざあざあ何者
をも拒否し、自己主張の激しい音。

「やっぱり……もう、ダメなのかな?」

「無理よ。もう……」

「そっか……」

潮風はやけに目に染みる。潮の香りが、俺の中に彼女が居たという跡を思い出させる。未だに首輪は外れそうにない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510o/>

潮風と彼女

2010年11月16日12時12分発行